



## 科学の振興と共に歩んだ60年

学校法人滝川学園 理事長・学園長

学校法人名栄学院 理事長

滝川 嘉彦

学園創立60周年記念号の紀要刊行おめでとうございます。名古屋文理大学は、昭和31年にその前身である名古屋栄養専門学院が名古屋市西区に開学してから60周年を迎えることになりました。この機会に我々の研究の源流について触れておきたいと思います。

本学は(株)渡辺製菓内に在った野原研究所を滝川一益先生が譲り受け専門学校を創立したところから始まります。野原研究所は、各種栄養強化食料の研究として、航空食(現在のレトルト食品に相当)、熱量食、未利用資源の分野において成果を上げ、「科学の振興と人材の育成」に貢献した由緒ある研究機関であったと名古屋栄養短期大学紀要20周年記念号に記されています。

専門学校を基礎に短期大学が併設され、さらに大学が設置されるに至ってもこうした研究への姿勢は変わらずに生き続けました。その足跡を紀要に辿ることができます。

昭和49年に「名古屋栄養短期大学研究委員会 生活科学ノート」として創刊されてから、昭和51年には「名古屋栄養短期大学 紀要」となり、その後大学開学3周年を記念して平成13年に「名古屋文理大学 紀要」を刊行しました。さらに平成25年に「食と栄養研究所」を設立し、その2年後の平成27年には「名古屋文理 食と栄養研究報告」を刊行しました。「科学の振興」の息吹は立学の精神に「学問を通して知識・技術を磨き」と記され今日にまで引き継がれています。

さて今日の「科学の振興」の頂点の一つにノーベル賞があります。今年はロック歌手ボブ・ディランが文学賞を受賞したということで記憶に残る年になりましたが、日本人からは大隅良典先生がノーベル医学生理学賞を受賞しました。学問の世界には国境は無いと思いつつも、同胞の栄誉は不思議と我々を奮い立たせるものです。しかしながら、先生の受賞会見において、今日の研究環境では同じような人材を輩出し続けることが難しいだろうという見解が示されたことは注目すべき事実です。

大学の多くは18歳人口の減少に伴い経済的に余裕がなくなり真っ先に研究費を減額しました。また中教審が提唱する大学の研究機能を大学院へ移行する考え方や、さらに文部科学省や厚生労働省の科研費減額の状況は研究者を大学から遠ざけてしまうことが危惧されます。

大学とは、中高の教科書のように物事を静的に捉えて伝承するだけでなく、研究という枠組みによる長い思念から得られる「真理」や、物事を否定的にとらえる中で醸成される「課題解決力」などダイナミックなところに価値があります。こうした空間を軽視することは、まさに「木を見て森を見ず」と言えるでしょう。しかしながら大隅先生の発言の中に一縷の希望を感じましたので、そのことを60年の記念に刻んでおきたいと思います。

我々の得意分野である「食」に例えてみましょう。「ガストロノミー」という言葉は一般には食通や美食学などと訳されますが、少し詳しく調べてみると料理を中心にした美術、社会科学、自然科学等様々な文化的要素で構成されるものを総称した言葉であることが判ります。さらに掘り下げると、

その中には音楽、建築、文学、演劇、化学、物理学、数学、生物学、地学、農学、歴史学、哲学など無限の広がりが存在します。

「食」を食品学や調理学といった狭い枠組みで捉えるのではなく、あらゆる分野を通して総合的に科学することによって、食の重要課題を解決しようという試みが「ガストロノミー」です。こうした柔らかな頭が今の日本に求められているのです。そして大隅先生は日本の大学には頭の柔らかな若者たちが少なからず存在すると発言されました。名古屋文理は、こうした未来を背負って立つ若者たちを学問をベースにしっかりと育てあげられる大学に成長しなければならないと改めて覚悟した次第です。

この60年間には、学園の内外を問わず実に多くの方々にご支援を頂きました。そうした関係者各位のご高恩に深く感謝し、今後とも一層のご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。最後に、今回の紀要編纂にご尽力された皆様にお礼を申し上げて60周年記念号発刊のご挨拶といたします。